

# コミュニティ心理学的実践の構成要素

飯田 香織<sup>i</sup>

個人の心の中だけではなく、社会状況や社会とのかかわりなども含めて生態学的視座で理解しようとする学問であるコミュニティ心理学は、対象や実践内容、研究内容も幅が広い。例えばコミュニティ心理学の研究テーマとしては、環境保全、暴力、環境改善への政策提言、交通問題、留学生の環境、スクールカウンセリングなどがある。しかし、どのような実践をコミュニティ心理学的実践と呼ぶことができるのかという、コミュニティ心理学的実践の構成要素についてまとめられた研究は少ない。本研究では、コミュニティ心理学会誌を中心として、これまでコミュニティ心理学というキーワードで研究されてきた論文が、どのような内容であるのかについて分類し、その分類からコミュニティ心理学的実践の構成要素を考えることを目的とする。その結果、コミュニティ心理学的実践の構成要素として、①現状に至る背景や影響などに目を向けて実践すること（生態学的視座で見ること）、②原因探索的な視点ではなく、支援志向的な視点で実践していること（洞察を得るためではなく、支援を行うためのアセスメントを行うこと）、③社会状況の変化に応じて生じてくる新しい変化に対しても積極的にその課題の成り立ちを考え、生態学的視座に基づいて支援を検討していくこと（新しい変化に対して開かれていること）、④環境そのものよりも環境の中にいる個人に関心が強く、環境が個人に与える心理的影響の改善に関心を持っていることが見出された。

キーワード：コミュニティ心理学的実践，コミュニティ心理学的実践の構成要素，生態学的視座，支援志向的

## はじめに

コミュニティ心理学は、第二次世界大戦からの帰還兵の半数近くは PTSD (Post Traumatic Stress Disorder) などにより治療が必要な状況であったことや、その他の様々な社会状況や、個人内界至上主義では十分でないという流れから、誕生した心理学である（笹尾・渡辺・池田，2007）。その学問の成立経過上、幅広い分野を対象とし、幅広い実践が行われているのは、必然であるということができる。

しかし、近年では筆者の研究対象である学校臨床においても、コミュニティ心理学の視点を活かした実践が重要であると言われる（鶴養，2011）が、どのような実践をコミュニティ心理学の視点を活かした実践と呼ぶことができるのか、についてまとめられている研究はほとんどないという現状である。本研究では、コミュニティ心理学的実践の対象と内容にまつわる構成要素を整理することを目的とする。

## 1. コミュニティ心理学的実践の報告（先行研究）

これまでコミュニティ心理学の視点を活かした活動の「構成要素」に着目した先行研究としては、

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

表1 臨床心理学的コミュニティ・エンパワメント・アプローチの構成要素 (窪田, 2009)

当事者の支援	①心理カウンセリング	個人への心理カウンセリングは身近な支援者へのコンサルテーションも含む。
	②心理教育	生じている問題についての正確な知識と対処方法についての情報提供。
	③スキル・トレーニング	問題への対処法として有効なスキルについてトレーニングを行う。
	④必要な専門的支援の提供者へのリファー	①～③の中で、より専門的な支援が必要かつ有効であると判断された場合、そのような支援の提供者へのリファーを行う。
身近な支援者への支援	①支援者のネットワーク作り・維持・強化	支援者相互のつながりを持つことは、適切な支援が行われるだけでなく、支援者自身のエンパワメントにもなる。
	②心理教育	身近な支援者への支援プログラムとして最も重要。当事者が抱えている問題や起こしている反応についての正確な知識・情報と、それに対してどのような支援を行っていくかについての知識・技術を提供するプログラム。
	③ケース・コンサルテーション	当事者の言動や反応の理解の仕方と対応についてのコンサルテーション。Caplan, Gの言う「クライアント中心の事例コンサルテーション」、および「コンサルティ中心の事例コンサルテーション」にあたる(植村, 2012)。
	④マニュアル・ワークシートの提供	身近な支援者が短期間に行うべき支援を理解し、機能することができるようになるための支援として、マニュアルやワークシートの提供を行う。
コミュニティ(の管理者)への支援	①コミュニティの全体状況の把握のための援助	対処計画を策定するために、コミュニティ全体の状況把握が不可欠。 1. 調査の実施と結果のフィードバック 2. システム関係図など、コミュニティ全体状況の図示 コミュニティの管理者に対し、問題を端的に示す図や文書の提示は、彼らが冷静さを取り戻し、問題に対処する力を回復する上で有効。
	②心理教育	コミュニティ(の管理者)に対しても、当事者および身近な支援者に生じている問題と対処方法について、正確な知識・情報を提供する。
	③コミュニティとしての支援システムの構築への支援	コミュニティ(の管理者)に対し、恒常的な支援システム構築のための支援を行う。Caplan, Gの言う「プログラム中心の管理的コンサルテーション」にあたる(植村, 2012)。
	④コミュニティとしての支援システムの運用への支援	支援システムを効果的に運用するために、実際の問題やその時のコミュニティのありように応じて調整していく。Caplan, Gの言う「コンサルティ中心の管理的コンサルテーション」にあたる(植村, 2012)。

窪田(2009)が挙げられる。窪田は、「問題を抱える／問題から直接大きな影響をこうむっている当事者、身近な支援者、彼らが所属するコミュニティに対して、同時並行的・多層的に支援を展開することによって、それぞれが潜在的に持っている力を高め、より自律的な生活の実現を目指すアプローチ」を「コミュニティ・エンパワメント・アプローチ」と定義し、「臨床心理学的コミュニティ・エンパワメント・アプローチの構成要素」を抽出している。その構成要素として述べられているものを筆者が表にまとめたものが、表1である。

表1より、当事者だけを支援の対象と考えるので

はなく、「身近な支援者やコミュニティ(の管理者)も支援対象と考えること、それぞれに対して心理教育を重要と考えて行うこと、支援システムの構築と運用を意識して行うこと」などが構成要素としてあげられる。それに加えて、窪田(2009)は「臨床心理学的コミュニティ・エンパワメント・アプローチの特質」として以下の5点を挙げている。1点目には、「個からネットワーク、支援システムまでを視野に入れた活動モデルであること」。2点目には、「各層へのアプローチを有機的なつながりの中で展開することでコミュニティの自律性を高めようとしていること」。3点目には、「当事者、身近な支援者、

コミュニティが潜在的に持っている力を高めるというエンパワメントの視点を重視していること。」4点目には、「本アプローチのプロセスとして4段階（8プロセス）を想定し、このプロセスに意識的な支援の展開を重視していること」。5点目には、「既存の理論と技法に新しい取り組みを取り入れていること」と述べている。ここで言う4段階（8プロセス）とは、準備、アセスメント、実施、評価の4段階をそれぞれ詳細な8プロセス（専門的支援者としての認知の獲得、臨床心理学的コミュニティ・エンパワメント・アプローチの始動、ともに問題に取り組む関係づくり、コミュニティ・エンパワメント・アセスメント、必要な支援と具体的支援計画、プログラムの実施、評価、終結とフォローアップ）に分けて考えられているものである。窪田（2009）においては、エンパワメントとコンサルテーションの概念からまとめられている部分が多いが、本研究においては、特に実践の対象と内容について考えたい。そのため、窪田（2009）の中でも、「身近な支援者やコミュニティ（の管理者）も支援対象と考えること、それぞれに対して心理教育を重要と考えて行うこと」、「支援システムの構築と運用を意識して行うこと」、「個からネットワーク、支援システムまでを視野に入れた活動モデルであること」、「既存の理論と技法に新しい取り組みを取り入れていること」という部分について比較検討を行いたい。

その他、「構成要素」という表現ではないが、「コミュニティ心理学の主題」として、J・オーフォードが Rappaport の概念を引用しながらまとめた8つの原理がある（J・オーフォード、1997）。その中で、実践の対象と内容に関わる部分としては、「問題の原因についての仮定の際に、時間を越えた、個人と社会的環境やシステム間の相互作用、ソーシャル・サポートと社会的力の構造を含むこと」、「日常的な社会文脈に近いところで実践を行うこと」、「進んで働きかけ、コミュニティにおけるニーズと特定のリスクを探し出して査定すること」、「治療よりも予防を重視した実践を行うこと」があげられる。しかし、

J・オーフォードの8つの原理においては、リスクを探し出して査定すること、日常に近いところで実践することは述べられているが、実践の内容についての言及はされておらず、その点が不十分であると考える。そのため本研究では、実践の構成要素について考えることとする。

J・オーフォードはイギリスのコミュニティ心理学者であるが、アメリカのコミュニティ心理学においては、J・ダルトン、M・イライアス、A・ウォンダースマン（2007）が「コミュニティ心理学における7つの中核となる価値観」として、個人のウェルネス、コミュニティ感覚、社会正義、市民参加、共同参画とコミュニティの持つ強さ、多様性の尊重、実証的基盤を挙げた。ここで言う「社会正義」とは、「資源、機会、義務、そして社会全体の権力を公平、平等に分配すること」と定義されている。

この中の「社会正義、市民参加、共同参画」を重要視することはアメリカの文化に裏打ちされているものと考えられる。当然コミュニティの在り方や人と人のかかわり方、宗教観などの差があるため、文化の違いが生じ、実践の内容や価値観も違いが生じると考えられる。「社会正義、市民参加、共同参画」などの個人の権利と社会との関係の重視は、アメリカでの中心的な価値観であると思われるが、日本においては、少し違う要素が抽出されるものと考えられる。本研究においては、現在までの日本におけるコミュニティ心理学の流れについて、考えたい。

そのためにも、2015年現在までにコミュニティ心理学会誌である『コミュニティ心理学研究』の中で報告されている臨床実践の中から、コミュニティ心理学的活動実践の構成要素を考えていきたい。この点については、「1975年から1995年までのコミュニティ心理学シンポジウムでの発表・討議テーマと報告数」（安藤延男・星野命・笹尾敏明、2007）（表2）と、「コミュニティ心理学研究1巻1号～8巻1、2合併号（全15冊）掲載論文のテーマ」（星野、2005）（表3）を引用して考えたい。

コミュニティ心理学シンポジウムというのは、日

本においてコミュニティ心理学会が設立されるまで、参加者自身が運営する形で行われてきたシンポジウムのことであり、コミュニティ心理学会の前身と考えることができる。表2はコミュニティ心理学会が設立され、学会誌である『コミュニティ心理学研究』が発行される前に、コミュニティ心理学会の前身であるコミュニティ心理学シンポジウムで発表されていたテーマをまとめたもの(安藤延男・星野命・笹尾敏明, 2007)を筆者が再びまとめたものである。つまり、表3より前の年代のコミュニティ心理学における研究テーマをまとめたものということになる。しかし表2は、援助の方法である「電話相談やセルフヘルプグループ」と同時に「地域社会の問題」のような課題の成立要因にまつわるテーマも一緒に述べられている。そのため、本研究では支援の具体的な介入方法と課題の成立背景についての研究などいくつかの基準によって分類していく必要があると考える。したがって、表2は、「発表された研究テーマごとに分類する」という点において、本研究の先行研究に当たるが、分類の仕方が不十分であったと考えるため、本論文では分類の仕方を変えることとする。

この表から、コミュニティ心理学的心理臨床実践の要素として、「地域社会の問題」、「援助システムと対象者の特性」、「異文化接触」、「大学キャンパス・大学生」、「職場への介入」、「電話による地域援助とそのシステム」、「介入の方法」、「ボランティアとその活動」、「セルフヘルプ・グループ活動」、「理論、コンセプト」にまつわる内容であること、ということが出来る。このことについては、安藤他(2007)は、各分野でのさらなる細分化が必要ではあるが、特徴的な点として、その多くがコミュニティの問題をただ取り上げて理解しようというだけでなく、「援助」、「サポート」、「ケア」、「活動」、「風土づくり」、「コミュニティ形成」といった積極的な実践介入を行っているということにあると述べている。このことから、コミュニティ心理学の要素として、実践的介入という要素も挙げられるのかもしれない。

実際に日本において、コミュニティ心理学会の前身である「コミュニティ心理学シンポジウム」が始まったのは1975年であり、そのシンポジウムを続ける中で、1995年の阪神・淡路大震災においては、心理臨床家が実際のコミュニティに出て、コミュニティ・メンタルヘルスに貢献するということがあった。コミュニティ心理学は、その学問の発足の背景として個人内界至上主義における面接室での2者関係のみでの支援への疑問があったように、心理臨床家が実際の対象者の環境であるコミュニティに関わるという点も特徴であるということができる。

さらに安藤(1998)は、1965年5月マサチューセッツのスワンプスコットに地域精神保健活動に従事している39名の臨床心理学者が、社会的介入の技術を持ち、コミュニティの問題に真に対処できるための教育訓練のあり方を検討するために集まり、そこでコミュニティ心理学が誕生したと言われる「地域精神保健のための心理学者教育に関するボストン会議(Boston Conference on the Education of Psychologists for Community Mental Health)」においても同じ問いについて議論された結果として示された、コミュニティ心理学者についての四つのタイプ、すなわち「『社会運動をする』心理学者」、「『社会実践をする』心理学者」、「社会工学者」、「新しいタイプの臨床心理学者」を紹介している。これらも、コミュニティ心理学的実践の要素として考えることが可能である。これらのうち、社会工学者は、環境設計や都市工学、行政・政策学分野、地域づくり運動などを包含するものであり、狭義の「心理学」と地域社会の課題とを橋渡しする中間的役割を担うジャンルであるとし、この学問が「健康と自己実現」(ウェルビーイング)にも寄与しようとする姿勢を示したと述べられている。

次に、『コミュニティ心理学研究』1巻1号～8巻1、2合併号(全15冊)の掲載論文のテーマについてまとめた表(表3)からわかることについて考えたい。

筆者はこれ以降の『コミュニティ心理学研究』に

表2 コミュニティ心理学シンポジウムでの発表・討議テーマと報告数（安藤・星野・笹尾，2007より一部改正）

テーマ	1975-1985年 (報告数)	1986-1995年 (報告数)
問題 地域社会の	地域社会の構造特性 (13), 地域ストレス・不安 (3), 人口密集 (2), 騒音問題 (1), スラム・ドヤ街問題 (5) 小計 24 (20%)	騒音 (3), ゴミ問題 (1), 住環境 (3), 地域災害 (2), 地域社会と住民組織 (2), スラム・ドヤ街問題 (2) 小計 713 (15%)
の特性 援助システムと対象者	自閉児の家族への地域援助 (6), 心身障害児家族の援助 (3), 非行対策 (4), 教育相談システム (2), 精神障害者への援助 (7), 女性のアルコール依存 (1), 高齢者・退職者問題 (1), 三歳児健診 (1), 成人病対策 (1), 虫歯予防対策 (2), 肥満 (1), 長期入院の問題 (1) 小計 30 (24%)	自閉症 / 心身障害児家族の適応 (4), 児童の養護と非行 (2), 精神障害者の自立 (2), 早期教育システム (1), 高齢者ケア (3), リハビリ病院の地域ケア (1), 児童虐待ホットラインのアセスメント (1), 寿夜間学校 (1), 酒場とマスターの援助行動 (1), 女性のアルコール依存 (1), リレーションセンター (2) 小計 19 (22%)
異文化接触	帰国子女問題 (1), 中国帰還者の問題 (4), 海外派遣員のリエンター (1) 小計 3 (2%)	異文化職務訓練と会社コミュニティ (2), 米国企業の現地人教育 (1), 国際行動能力 (2), 国際研修 (1) 小計 9 (10%)
ス 大学 キャン パス	大学精神保健 (2), 東大生の意識調査 (2), 原級残留リスクの高い学生への介入 (1), 心理療法への学生の期待 (1), 若者のアイデンティティ確立への援助 (1) 小計 7 (6%)	学生のストレスとその対処資源 (1), 大学生のソーシャルサポート (1), 学生相談とコミュニティ (1), 大学生の環境保護運動を促す要因 (1), その他 (4) 小計 8 (9%)
入 職場 への 介	企業組織の計画的変更 (1), 企業組織への介入 (2), 海外勤務者のリエンター問題 (1) 小計 4 (3%)	職場のストレスと対処行動 (1), 大学コミュニティにおける組織改革 (2), その他 (4) 小計 7 (8%)
助 る 地域 援	ボランティア相談員のメンタルヘルス (8) 小計 8 (7%)	ボランティアの組織・倫理問題ほか (7) 小計 7 (8%)
介 入 の 方 法	コンサルテーション (2), システム介入 (1), 行政への介入 (2), グループ・アプローチ (3), コミュニティ・オーガニゼーション (1), 時間制限心理療法 (1), 住民参加型福祉サービスによる風土作り (1) 小計 10 (8%)	ショッピングモールへの応用行動分析的介入 (1), 学校コンサルテーション (2), 精神保健コンサルテーション (1), 中国帰国者への精神保健コンサルテーション (1), ネットワークのストレス緩衝効果 (1) 小計 7 (8%)
動 ア と そ の 活	ボランティア育成 (3), 学生ボランティアプレイ・パーク運動 (1) 小計 10 (8%)	河川浄化ボランティア事業におけるコミュニティ形成 (1), 主婦のピアカウンセラー (1) 小計 2 (1%)
プ ブ 活 動	セルフヘルプ・グループの機能と役割 (1), セルフヘルプ・グループと外的システムとの連携について (1) 小計 2 (2%)	自助グループの役割 (1), グループカウンセリングから自助グループへとコミュニティでの組織化 (1) 小計 2 (2%)
コ ン セ プ ト	コミュニティ (1), 援助行動 (3), 危機と対処 (1), コミュニティ・ワーカーとは (1), 生態学的心理学と応用 (2), 私とコミュニティ心理学 (3) 小計 10 (8%)	日本のコミュニティ心理学 (2), コミュニティ心理学のキー・ワード (1), 学校教育とコミュニティ心理学 (1), コミュニティと病院心理学 (1) 小計 5 (6%)
他	19 (15%)	7 (8%)
合計	123	88

表3 コミュニティ心理学研究1巻1号～8巻1.2合併号(全15冊)掲載論文のテーマ(星野, 2005)

援助システムと対象者の特性	セルフヘルプ・グループ(SHG)活動
保健所デイケア 1	その活動 3
女性センター相談室 1	自助資源としてのインター
DVシェルター活動 1	ネット 1
老健施設 1	
地域社会の問題	理論およびコンセプト
ゴミ捨て行動への介入策 1	日本コミュニティ心理学小
環境保全態度 1	史 1
	臨床分野への貢献と展開 1
異文化接触	ボランティアとその活動
留学生のサポートシステムと適応ほか 3	子育て支援ボランティアの養成と変容 1
中国帰国者へのサポートシステム 1	NPO活動(安心とつながり)のネットワーク 1
外国人労働者のストレス 1	中学生のヘルパーによるサポートシステム 1
	電話による地域援助とそのシステム 1
職場への介入	大学キャンパス・大学生
会社コミュニティにおけるサポート 4	組織の設計と立ち上げ 1
メンタリングと人材開発 1	教員-学生間の葛藤 1
リストラによる失業者 1	医学生への態度変容 1
介入の方法	その他(教育関係ほか)
エンパワメント 4	学級風土研究 3
電子メールによるサービス 1	中学生の有力化・無力化 1
	老人ホームスタッフのバーンアウト 1
乳がん患者へのサポートグループによる介入 1	バーンアウト尺度 1
境界性人格障害のデイケア 1	学校におけるコンフリクト解決 1
保育士による親へのサポート 1	地方都市の教育行政支援 1
トラウマを受けた子どもへの支援 6	教員文化, 高校教員の協働性 1
	家族の集まる場(描画法) 1
	山村留学家族と地域住民 1

においても、掲載されているテーマの分類を行い、コミュニティ心理学的実践の構成要素を考えていきたい。しかし、表3の枠組みでは、表2と同じように「異文化接触」という課題の成立背景にまつわる部分と、「セルフヘルプ・グループ」などの実際の支援の方法が区別されずに分類されていることになる。そのため、コミュニティ心理学という視点から、課

題の成立、そこから見える特性、支援システムの種類、実際の介入技法などの分類の軸を持って分ける必要があると考える。そのため、次章において上記の実践報告や研究を再整理することとする。

## 2. コミュニティ心理学的実践に関する研究の分類

### (1) 分類の方法

これまでのコミュニティ心理学というキーワードで研究された論文を分類する。その結果見えてきた構成要素の特徴について考察する。分類については、以下の方法で行うこととする。

①国内論文を検索するCiNiiにおいて、「コミュニティ心理学」というキーワードで検索をして、検索された論文を分類対象とする。今回は実践にまつわる論文を対象とするため、そのうち、書評と理論に関する論文は分類対象外とする。

②論文の中で研究対象としているテーマの内容に応じて、「課題の成立過程・背景・環境について述べた論文」、「課題に対する支援システムについて述べた論文」、「具体的な介入技法やプログラムについて述べた論文」というカテゴリーに分ける。

③②において分けたそれぞれのカテゴリーの中で、さらに、アプローチする対象に応じて「環境を対象としているもの」、「ある特定の対象者群を対象としているもの」、「個人を対象としているもの」という形で分類する。また、コミュニティ心理学の視点に立つと必要であると考えて作成しているテーマ(例：貧困問題、騒音問題)についても、分類項目を作成し、対象となる論文が無い場合、空白とする。

例えば、「課題の成立過程・背景・環境について述べた論文」の中で、「環境を対象としているもの」には、「地域社会が担うべき教育的役割」という論文が分類され、「ある特定の対象者群を対象としているもの」には、学齢期という対象者群の環境を研究対象としているという意味で「学級風土質問紙の臨床的妥当性検討の試み」という論文が分類され、

「個人を対象としているもの」には、人々をとりまく環境を対象としていながら、個人を対象としてアプローチしようとしているテーマ（例えば、「環境問題に対するある青年の認知の変化」など）があればそこに分類されるところだが、そのようなテーマは見られなかったということで、空白になっている。

④そして、それらを分類した結果から、現在までのコミュニティ心理学においては、どのような部分の研究や実践が行われ、今後どのようなことが必要になるのか、ということについて考える。

(2) コミュニティ心理学的実践に関する研究の分類

CiNiにおいて、「コミュニティ心理学」というキ

ーワードで検索した結果、出て来た論文の数は422件であった。そのうち、文献についての書評が39件、理論に関する論文が68件あった。今回の分類では、実践にまつわる論文を対象とするため、422件のうち書評の39件と理論に関する論文68件を引いた、計315件を対象として分類を行った（表4、表5、表6）。この検索は2015年5月14日に行った。なお、以下の分類の枠組みは、筆者が独自に作成したものである。

分類の表記は以下のように行う。

○『コミュニティ心理学研究』（コミュニティ心理学会会誌）に掲載の論文

★『コミュニティ心理学研究』以外に掲載の論文

表4 課題の成立過程、背景、環境について述べた論文（筆者作成）

アプローチする対象	テーマ	論文趣旨（論文数）	
環境を対象としているもの	環境保全	○地域社会が担うべき教育的役割	2
		○ニュータウン開発に伴う環境変化と住民の交流	1
		○里地里山保全活動促進の規定因と情報媒体の影響	1
		○生物多様性保全活動の現場における心理学的活動の実際	1
		○地域社会における環境問題の解決と合意形成	1
		○正当性への視点がもたらす研究と実践	1
		○環境保全問題へのコミュニティ心理学の寄与	1
	貧困問題		
	騒音問題		
	地域環境	○大都市住民のコミュニティ意識とまちづくり活動への参加	1
		○沖縄本島における赤土流出問題をめぐる社会的ガバナンスの事例調査	1
		○「自殺希少地域」徳島県旧海部町における相互扶助組織の特性	1
		○住民の墓地建設に対する困惑と居住環境の維持対策ニーズ	1
		○写真調査法（地域資源開発・観光地の魅力測定）	2
		○コミュニティのニーズ把握 / アドボカシー / エンパワメント（フォトボイス）	1
		★暴力追放に関するコミュニティ心理学的接近	1
		★地域の活性化、美化、防犯・防災活動に寄与する大学の役割に関する住民の意識と期待	1
	子ども	○写真投影法による子どもの危険認知の把握	1
	精神疾患		
	女性	○女性運動に参加した女性たちのコミュニティ感覚と世代継承性	1
	高齢者	○写真による高齢者の地域生活把握の試み	1
	学校臨床	○学級風土研究の意義	1
		○地方中核都市の教育行政	1
		★コミュニティ心理学と自閉症児治療教育	2
		★コミュニティ心理学からみた学校と地域社会の連携	1
	組織特性	○研究者と組織のコミュニティ心理学的協働モデル	1
		★コミュニティ介入の効果を高める組織特性の検討	1
	国際的視点	○米国におけるコミュニティ心理学と多様性の問題	3

		○グローバル化された暴力とコミュニティ心理学 (アフガニスタンとイラクの戦争)	1	
		○ハワイのコミュニティ心理学と平和教育	1	
		○国際的視野から見たコミュニティ心理学	1	
		★資料 RESPECTFUL (人間尊重) カウンセリング	1	
		★ハワイのコミュニティ心理学	2	
		★アメリカにおけるスクールカウンセリングプログラムの現状	1	
	インターネット	○インターネット・コミュニティと福祉・医療援助コミュニティの問題点	1	
	権利にまつわる課題			
	依存症	★臨床心理学的地域援助としてのカルトカウンセリング	1	
	非行・司法・矯正			
	生涯発達			
	ハラスメント	○コミュニティ心理学から見たセクシュアル・ハラスメント	2	
	家族			
	NPO			
	社会変革	○コミュニティ心理学と政策づくりへの参加	1	
	ボランティア			
	交通問題	★点字ブロック付近への迷惑駐輪の軽減 (データ付きポスター掲示の効果)	1	
	医療	○小児病院新卒看護婦のストレス反応に関連する要因	1	
ある特定の対象者群を対象としているもの	異文化接触	留学生	○中国人研修生の日本語学習意欲と研修環境の認識との関連 ○日本人短期海外留学生の地域社会への参入	1 1
		外国人労働者		
		中国帰国者	○中国帰国者に対するコミュニティ・アプローチ	1
		在住外国人	○多文化社会における教師と外国人学生の葛藤事例の内容分析 ○グローバル社会の子どもの危機と危機介入	1 4
		多様性受容	○多様性を楽しむ社会の実現に向けて ○米国コミュニティ心理学における多文化主義と多様性の役割	1 1
		国際的視点		
		学校臨床	○学級風土質問紙の臨床的妥当性検討の試み ○学校現場へのコミュニティアプローチとその評価 ○日本の学校への新しいコミュニティ心理学的アプローチ—米国の MEASURE を参考にしたスクールカウンセリングの役割 ★家庭・学校・地域の機能不全を「治す」:教育コミュニティ心理学の視点から ★学校心理学とコミュニティ心理学 ★コミュニティ心理学から見た学校保健	1 11 1 1 1 1 1
		地域環境		
		行動コンサルテーション		
		子育て世代		
学校臨床				
大学生	○教育組織 (公立大学) の設計と立ち上げおよびその評価 ★学生に対するメンタルヘルス支援の課題	1 2		
産業	○バーンアウト研究の現状と課題 ○会社コミュニティにおけるサポート	1 2		
高齢者	○介護老人保健施設における心理コンサルテーションの役割	2		
母子	○コンサルテーション (母子生活支援施設)	1		
女性				
被害体験を有する者 (トラウマを有する者)	○ドメスティック・バイオレンスの現状と展望 ○トラウマを受けた子どもたちおよび家族への支援 (米国犯罪被害者センターのとりくみと日本の課題・犯罪被害者支援の立場から) ○トラウマがもたらす子どもの危機	1 4 1		



	性的マイノリティ		
	身体疾患	★メニエール病発症背景因子に関する疫学的調査研究	2
	精神疾患		
	障害を有する者	○障害学の視点 ★地域社会に根ざした「援助・援護方法」への拡大	1 1
	家族	○きょうだいへのアプローチ ○コミュニティの協働による家庭内暴力への対応	1 1
	ひきこもり		
	発達障害	★コミュニティ心理学と自閉児治療教育	5
個人を対象としているもの	個別支援		
	援助要請		

表5 課題に対する支援システムについて述べた論文（筆者作成）

アプローチする対象	テーマ	論文趣旨（論文数）	
環境を対象としているもの	環境保全	○環境保全的態度と援助的態度に関する分析	1
		○コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加：コミュニティ意識尺度の開発	1
	貧困問題		
	騒音問題		
	地域環境	○保健所デイケアにおける諸活動の多様な機能と工夫	1
		○地域情報化活動への参与観察的研究	1
		○自治体の対人援助サービスにおける研究者の多重関与（応用行動分析）	1
		○地域コミュニティ領域の実践におけるプログラム評価	1
		○エンパワーされたコミュニティの創生過程に関する研究	2
		★「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけて	1
		★コミュニティ心理学の現在とメンタルヘルス	1
	子ども	★地域保健福祉活動の主体と方法に関するコミュニティ心理学的研究	1
		○トラウマを受けた子どもたちおよび家族への支援	1
		○子ども虐待介入における児童相談所と養育者のぶつかり	1
		○子どもの虐待と児童養護施設の役割-子どもと家族を支えるために	1
		○施設の子どもの親の支援体制について	1
		○子どもたちの支援体制について	1
		○虐待を受けた子どもの援助職への心理コンサルテーション	1
	精神疾患	○里親養育に関する文献的考察	1
		○児童福祉施設における施設内暴力の解決に向けて（安全委員会方式）	1
	女性	○ドメスティック・バイオレンスに対するフェミニストセラピーからのとりくみ ○中年期女性のライフキャリア・アンカー	1 1
	高齢者		
	学校臨床	○学級風土質問紙作成の試み-学級風土を捉える尺度の帰納的な抽出	1
	組織特性		
	国際的視点		
	インターネット	○自殺関連サイト上の掲示板の問題点に関する質的研究	1
		○関心事や「問題」を共有する人々が参加するオンライングループ	1
	権利にまつわる課題		
	依存症		
	非行・司法・矯正		
	生涯発達	○子どもは変わる，大人も変わる-人間発達の可塑性	1
	ハラスメント		

	家族	○トラウマを受けた子ども達・家族への支援 (子供の虐待と児童養護施設の役割・施設の子どもと親の支援体制について)	2	
	NPO	○コミュニティ・サイコロジストのNPO活動	1	
	社会変革			
	ボランティア	○中高年ボランティアの参加動機, 継続動機, 成果認識の関連 ★地域連携と組織運営: 学生ボランティア活動の課題	1 1	
	交通問題	★不法駐輪に対する行動分析的アプローチ ★記録公表手続きとプロンプトが自転車及びバイク利用者の歩道における安全行動に及ぼす効果	1 1	
	医療	★病院ボランティア・コーディネーターに関するコミュニティ心理学的考察 ★ナースのための実践!心理学: 人をどう理解しかかわるか: 絆が変えた勤務表	1 1	
ある特定の対象者群を対象としているもの	異文化接触	留学生	○コミュニティ心理学から見た留学生指導 ○大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入 ○留学生のソーシャルサポートと適応に関する研究の動向と課題 ○Determinants of Depression Mood and Neurotic States among Foreign Graduate Students of Engineering at a Japanese University ○サポートに関する中国人就学生と中国人留学生との比較 ○大規模な留学生受け入れを行う大学における留学生支援 ○分離型キャンパスにおける留学生支援とリソース ○アルバイト先における被差別感の原因帰属と間接的接触 ★在日留学生の異文化適応 (ソーシャル・サポート・ネットワーク) ★コミュニティ心理学的発想に基づいた留学生相談の実践的展開 ★留学生支援システムにおける行動指針とスタッフ・ディベロプメント	1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1
		外国人労働者	○「外国人労働者」のストレス対処と相互援助組織の役割	1
		中国帰国者	○中国帰国者におけるソーシャル・サポート利用の精神健康への影響 ★中国帰国者へのコミュニティ心理学的接近	1 1
		在住外国人	○日系ブラジル人の抑うつ症状と文化的所属感およびサポート・ネットワーク	1
			○滞日日系ブラジル人児童生徒支援のための支援者ネットワークの試み	1
			○日本語ボランティア教員による外国人生徒への支援	1
			○滞日日系ブラジル人青年三世・四世の親に対する認識と親の行動	1
			○国際交流合宿の意義と課題: プログラム評価を用いた検討	1
			○在住外国人に対する心理援助	2
			○異なる文化的背景を持つ子どもへのコミュニティ心理学的支援 ○ニューカマーの子どもの高校進学に関する心理的プロセスの検討 ★滞日日系ブラジル人の学校適応	1 1 1
		多様性受容		
		国際的視点		
		学校臨床	○学校組織における養護教諭の今日的機能 ★コミュニティ心理学と自閉症児治療教育	1 1
		地域環境		
		行動コンサルテーション	○行動コンサルテーション ★地域社会に根ざした「教育方法」から「援助・援護方法」への拡大	1 1
		子育て世代	○乳幼児をもつ母親が自宅に感じている回復的特性 ○保育巡回相談におけるコンサルテーション満足度評価尺度の作成の試み	1 1
		学校臨床	○中学校における生徒の有力化/無力化について ○教師バーンアウトのメカニズム ○高校における研究 (教員文化・協働) ○中学生を取り巻くヘルパーからのソーシャルサポートと適応 ○中学生の「子どもへのナーチャランス」を促進するプログラム開発 ○自傷行為を呈した生徒の学校と家族へのコミュニティ心理学的援助 ○スクールカウンセリングと学級風土 ○小学校における「子どもと親の相談員」としての活動の展開 ○学校・教育領域において役立つ評価	1 1 2 2 1 1 2 1 1 1

	○教室の多動児に対する生態学的視座からの理解	1	
	○地域のニーズに合わせて柔軟に変化し続けるキャンプ実践報告	1	
	○解決志向ブリーフセラピーのコンサルテーション	1	
	★精神遅滞児に対するインターベンションの在り方	1	
	★コミュニティ心理学と自閉症児治療教育	1	
	★学校コミュニティ・ベースの包括的予防プログラム	1	
	★中学生へのナーチュランス（養護性）を育む発達教育プログラム	1	
	★カウンセリング・スキルを考慮した授業づくりに関する実証的研究	1	
	★発達援助者としての特別支援教育コーディネーターの役割	2	
	★ある公立小学校における取り組みの総括と今後の日本の教育への提言	1	
	★不登校の「中1」ギャップについてのコミュニティ心理学的検討	1	
大学生	○大学生の満足感と教育環境要因	1	
	○大学教員と臨床心理士のコラボレーションによる学生相談実践の評価	1	
	○大学生におけるカウンセリングに対する態度とその関連要因	1	
	○臨床心理行政論の授業が大学生の地域コミュニティへの態度に及ぼす影響	1	
	○学生相談領域からの報告（コンサルテーションの理論と実際）	1	
	★学生相談における多面的アプローチの検討	3	
	★昭和女子大学が学生相談室を機能させるまで	1	
	★学生相談の視点からみた「予防」	1	
産業	○リストラ失業が失業者の精神健康に及ぼす影響	2	
	○経営組織における発達の支援関係の男女比較	1	
	○特定保健指導の質の管理について	1	
	○産業組織におけるメンタリング・プログラムの事例	4	
	○心理臨床実践におけるコンサルテーション：産業領域	1	
	★産業カウンセラーのコミュニティ心理学的視点	1	
	★G. キャプランのメンタルヘルス・コンサルテーションにおける主題妨害低減法	1	
高齢者	○特別養護老人ホームの介護スタッフにおけるバーンアウト、予防的視座	1	
	★在宅要介護老人へのアプローチ	1	
母子	○子どもに対する母親の罪障感と社会的援助資源-子どもの年齢による差異	1	
女性	○女性センター相談室における援助サービスと役割	1	
被害体験を有する者 (トラウマを有する者)	○ドメスティック・バイオレンス被害者に対する援助	1	
	○施設の子どもと親の支援体制について	1	
性的マイノリティ	○性的マイノリティにおける受容体験と自尊心	1	
	○性同一性障害を自認する当事者の性別移行の際の社会適応再構築プロセス	2	
身体疾患	★冠動脈心臓疾患予防のためのコミュニティ心理学アプローチ	1	
精神疾患	○接触体験が精神障害者への態度の変容におよぼす効果	1	
障害者	★継続性のあるアフターケアの意味するもの	1	
	★コミュニティ心理学と自閉症児治療教育	1	
	★地域社会に根ざした「教育方法」から「援助・援護方法」への拡大	1	
	★入所型知的障害児施設における家族援助	1	
	★視覚障害者に対する環境的障壁の低減	1	
	★京王プラザホテルによるバリアフリー化への取り組み	1	
家族	○自傷行為を呈した生徒の学校と家族へのコミュニティ心理学的援助	1	
	★コミュニティ心理学と自閉症児治療教育	1	
ひきこもり	○ひきこもりのセルフヘルプ・グループ代表者との協働	1	
発達障害	★コミュニティ心理学と自閉児治療教育	12	
	★精神遅滞児に対するインターベンションの在り方	11	
	★QOLを高める学生相談活動（発達障害学生への支援）		
個人を対象と しているもの	個別支援	○主観的幸福感の研究動向	1
	援助要請	○心理専門職への援助要請に対する態度尺度の作成	1

表6 具体的な介入技法やプログラムについて述べた論文（筆者作成）

アプローチする対象	ジャンル	論文趣旨（論文数）	
環境を対象としているもの	環境保全		
	貧困問題		
	騒音問題		
	地域環境	○集団説得による農家の濁水削減行動の促進 1 ○東日本大震災におけるペット救援活動とその課題 1 ★地域エンパワメントの実践に関するコミュニティ心理学的研究 1	
	子ども	○写真投影法に見る子どもにとっての環境内資源：友人関係に焦点を当てて 1 ○DV被害家族・虐待被害児への心理的支援 1	
	精神疾患		
	女性		
	高齢者		
	学校臨床	○中学生のナチュラランスを形成する発達教育プログラムの開発とその効果 1	
	組織特性		
	国際的視点		
	インターネット	○自助資源としてのインターネット（ひきこもりの人たちが参加する電子掲示板） 1 ★広域ネットワークを活用した地域精神保健（ソーシャルサポートシステム作り） 1 ○電子メールによる「心理援助サービス」の実践的研究 1	
	権利にまつわる課題		
	依存症		
	非行 / 司法 / 矯正	○更生施設におけるグループワークを用いた社会復帰支援プログラムの検討 1	
	生涯発達		
	ハラスメント		
	家族		
	NPO		
	社会変革		
	ボランティア		
	交通問題		
	医療		
ある特定の対象者群を対象としているもの	異文化接触	留学生	○留学生相談におけるコミュニティ心理学的アプローチの試み 1
		外国人労働者	
		中国帰国者	
		在住外国人	○国際交流グループTEAの活動が異文化間の友人形成与える影響 1 ★コミュニティ心理学的アプローチによるニューカマー児童の支援 1
		多様性受容	
		国際的視点	○海外での戦争やテロにおける支援 3 ○リスク状態にある思春期・青年期への援助（韓国） 1 ○途上国における Early Childhood Development プログラムの効果 1
	学校臨床		
	地域環境	○フォトボイスによるコミュニティのニーズ把握、アドボカシー 1	
	行動コンサルテーション	○発達障害児への「柔軟な指導」のための行動コンサルテーション 1	
	子育て世代	○保育士による親の“良い行動”視点強化の指導とその効果 1 ○子育て支援ボランティア養成プログラムを受講したボランティアの変容 1	
	学校臨床	○不登校児の親の会における援助機能 1	
		○学校コミュニティにおけるコンフリクトに対する非暴力的実践方法による解決 1	
		○心の授業としてのストレスマネジメント 1	

	○山村留学における留学家族と地域住民の意識	1
	○ある小学校低学年クラスの崩壊危機への協働プログラム介入	1
	★コミュニティ心理学と自閉児治療教育	1
	★スクールカウンセリングにおけるコンサルテーションの方法	1
	★次世代型ファカルティ・ディベロップメント（FD）・プログラムに向けて	1
	★学校・コミュニティにおける総合的な暴力予防プログラムの構築	1
大学生	○東日本大震災後の大学コミュニティにおける学生相談活動の展開	1
	○コンサルテーション（学生相談領域/解決志向ブリーフセラピー）	2
産業	○コンサルテーション：産業領域からの報告	1
高齢者	○都市一人暮らし高齢者の「自立」を考えるグループ活動の意義と課題	1
母子	○コンサルテーション：福祉領域からの報告—母子生活支援施設—	1
	○母子生活支援施設におけるシングルマザーに対するグループ介入プログラム	1
女性		
被害体験を有する者 (トラウマを有する者)	○ドメスティック・バイオレンス被害者支援（シェルター活動等）	2
	○コミュニティの中での予防的支援（FLC子ども向け予防教育プログラムの紹介）	1
	○子どものストレスと動作法	1
	○ケンブリッジ病院暴力被害者支援プログラム（VOV）（暴力被害者を支える）	1
	○東日本大震災後の支援（大学学生相談・子どもへの遊び支援・俳句/連句作り）	3
性的マイノリティ		
身体疾患	○短期型サポート・グループ介入が術後乳がん患者のQOLに及ぼす効果	1
	○HIV自己イメージ尺度（HIVSIS）の信頼性と妥当性の検討	1
	○心理臨床実践におけるコンサルテーション：医療領域からの報告	1
	★がん患者会参加者のソーシャルサポートの授受と心理的適応との関連	2
精神疾患	○接触体験が精神障害（者）への態度の変容におよぼす効果	2
	○境界性人格障害へのデイケア	1
	○精神障害者スポーツと患者会支援	1
	○コミュニティ支援、べてる式。	1
障害者	○学校コンサルテーションによる特殊教育教師の専門性支援	1
	○相互信頼関係の形成と暴力的行為の改善を目指した教育的係わり合い	1
家族	○家庭における家族の集まる場—描画法「家族の集まる場」	1
	○ケンブリッジ病院暴力被害者支援プログラム（VOV）（暴力被害者を支える）	1
	○家庭内暴力の加害者への対応	1
	○日米におけるベアレンティングプログラム研究の現状と課題	1
	○自死遺族を対象とするサポートグループの実践とその特徴	1
	○児童相談所における家族再統合に向けた協働的心理援助モデルの構築	1
	★コミュニティ心理学と自閉児治療教育	3
ひきこもり	○自助資源としてのインターネット—「ひきこもり」の人たちの電子掲示板	1
発達障害	★コミュニティ心理学と自閉児治療教育	3
個人を対象としているもの	個別支援	
	★ロボットの外被をまとった不登校児のプレイセラピー	1
	○個人のごみ捨て行動への介入	1
	援助要請	

### (3) 分類の結果

まず、上記の分類を数量化し分布をみている（表7）と、様々な事例にかかわる際にもその「個人」を正面に据えてみていく個人内界を最重視するような見方が圧倒的に少なく、対象事例が一つであっても、「現状に至る背景や影響などに目を向けて実践する（生態学的視座で見る）」ということが、コミュ

ニティ心理学的実践の構成要素の第一の特徴といえることができるであろう。例えば個別支援を行う場合でも、その本人の背景を意識せずに「不登校の小学生との面接過程」という切り口で事例を見るのではなく、「ニューカマー児童の支援」というようなその事例の持つ背景を意識した切り口で事例を見るということが挙げられる。

表7 コミュニティ心理学に関する研究の分類結果（筆者作成）

研究テーマ / 支援の対象	環境を対象としているもの	ある特定の対象者群を対象としているもの	個人を対象としているもの	計
課題の成立過程、背景、環境について述べた論文	44	52	0	96
課題に対する支援システムについて述べた論文	34	110	2	146
具体的な介入技法やプログラムについて述べた論文	10	61	2	73
計	88	223	4	315

また、特徴的であったのは、「ある特定の対象者群を支援対象としているもの」が大変多く、支援の必要な対象者群にどのように支援するとよいか、という「原因探索的な視点ではなく、支援志向的な視点で実践している（洞察を得るためではなく、支援を行うためのアセスメントを行う）」ということが、コミュニティ心理学的实践の構成要素の2点目ということができると思われる。つまり、「過去」に目を向けたものではなく、「現在」と「未来」に目を向けて支援をしようとするテーマが多く見られた。このことは、コミュニティ心理学が「人が本来もっている強さとコンピテンス（有能さ）を重視すること」（植村, 2012）という基本理念を持っていることと関係すると思われる。

テーマの内容を見てみると、日本においてコミュニティ心理学が研究され始めた初期の研究テーマとしては、先行研究（表2）からわかるように、「地域社会、援助システム、異文化接触、大学生、産業、電話相談、介入、ボランティア・セルフヘルプグループ」であった。これらのテーマへの関心は引き継がれながらも、最近では「発達障害、学校臨床、精神疾患、身体疾患、インターネット、ひきこもり」等のテーマにおいても研究が増えてきている。「社会状況の変化に応じて生じてくる新しい変化に対しても、積極的にその課題の成り立ちを考え、生態学的視座に基づいて支援を検討していく（新しい変化に対して開かれている）」ことも、コミュニティ心理学的实践の構成要素の3つ目ということができると思われる。コミュニティ心理学は、植村（2012）が「複雑化した現代の多様な社会問題に適切に対応

していくためには、多側面から問題をとらえ直し、要因を解きほぐす必要がある、そのためには多職種や他学問間の連携による協力が必要である」と述べているように、新しい課題に対しても開かれた態度を持っていると言うことができる。このことは、窪田（2009）が「臨床心理学的コミュニティ・エンパワメント・アプローチの特質」の5点目として挙げている「既存の理論と技法に新しい取り組みを取り入れていること」とも共通すると思われるが、新しい取り組みを取り入れるだけではなく新しく生じた課題に対しても、コミュニティ心理学の枠組みで理解を試み支援を模索していく、ということである。

さらに、テーマとしては環境保全や、地域環境に関するテーマも大変多かった。このことは、「人と環境の関係性に着目してみる」と言え、この点も4つ目の構成要素と考えて良いと思われる。例えば、「課題の成立過程、背景、環境について」の「地域環境」の項目にある「自殺希少地域における相互扶助組織の特性」という研究などは、クライアントとカウンセラーの2者関係を一番大事にする心理学の視点から見ると、同じ「自殺」という事象に対して、不幸にも自殺という事象に至ってしまった経過や葛藤などについて詳細に考察する研究になると思われる。しかし、コミュニティ心理学の研究では、そのような状況につながる環境側の要素は何か、その環境が個人に与える影響はどのようなものであったのか、どのようなソーシャルサポートがあれば自殺を防ぐ事が出来たのか、という視点で事象を見ていくことになる。この部分は、コミュニティ心理学の本質と言っても良いかもしれない。しかし、環境自体

の特徴とそれに対する対策を考えていく視点とは少し違いがあり、あくまでも、「環境と個人（個人の集まりとしての集団の場合もある）の関係を対象としている」ものが多いということができると思われる。環境側の変化すべき部分というよりも、「環境が個人に与える影響の改善」に着目しているものが多いと思われる。つまり、あくまでも支援や研究の対象は「環境」ではなく、「その環境にある個人」なのである。この部分が、あくまでも「心理学」である所以と思われる。

例えば、先にも述べた「課題の成立過程、背景、環境について」の「地域環境」の項目にある「自殺希少地域における相互扶助組織の特性」という論文の場合も、立地条件や人口密度等に関心を向けるのではなく、どのような人と人のつながりがあれば自殺を少なくできるのか、という人々の体験に関心が向けられている。ただし、コミュニティ心理学においても「個人や集団の環境を良くしていくために」環境を変えるべく働きかけていく場合には、「社会変革」として対象としている。

これらのことから、構成要素の4点目として、「環境そのものよりも環境の中にある個人に関心が強く、環境が個人に与える心理的影響の改善に関心を持っていること」があげられると思われる。一般的に「コミュニティ」と言った時に、日本では「地域」が連想されるため（飯田, 2014）、「環境」に着目すると思われることが多い。しかし、今回の分類において、「環境」との関係を考慮して生態学的視座よりアセスメントを行うが、あくまでも「ある環境要因との関係の中で、“個人”がどのように感じているか」という個人の認知を対象とするところが、特徴であった。

さらに、筆者は、「貧困問題」や「騒音問題」などもコミュニティ心理学の研究対象となる課題であると考え、その項目を作成していたが、対象となる論文はなかった。このことは、上述のこととも関係して、より環境側に起因する部分が多く、環境を変えなければいけない課題として考えられているからか

もしれない。つまり、コミュニティ心理学として貧困問題を考える時には、例えば「生活保護受給家庭の子どもが持つ心理的特徴」のように、環境の状況から受ける心理的影響に関心を向けると思われる。この部分は、社会の現状に対する調査も行い、その結果を基にして貧困問題に対しての対策などを考えていく社会学とも違う部分であると考えられる。そのほかにも、生態学的視座で理解して、多方面から支援していくべき課題としての虐待にまつわる研究ももっと多くても良いように思われた。虐待にまつわる論文としても、「トラウマケア」の要素が強く、環境や制度を変えていくことを提案するような社会変革を意識した論文は少なかったように思われる。これらのことから、今後は、環境自体をどのように変えていくことが予防的であるかという、環境側の変革を対象とした研究が数多くされることも、学問的發展につながるかもしれない。

### 3. 分類の結果から見えてくること

本研究の分類結果と窪田（2009）における実践の対象と内容にかかわる構成要素の部分について比較検討を行いたい。

まず、「身近な支援者やコミュニティ（の管理者）も支援対象と考えること」については、『保育巡回相談におけるコンサルテーション』のように、コンサルテーションを行うこと自体が支援者の支援を行っていることを示すものである。また、今回の分類では、「支援システムや介入プログラム」について研究されたものが多かった。「支援システムや介入プログラム」を構築していくことも、支援者やコミュニティの管理者支援になるものと考えられる。これらのことから、「身近な支援者やコミュニティ（の管理者）も支援対象と考えること」については、共通して見出された要素と考えることができる。しかし、「心理教育を重要と考えて行うこと」については、ペアレンティングプログラムや暴力予防プログラム、ストレスマネジメントについて述べられた

論文は心理教育に該当すると思われ、実践においては多くなっていると感じるが、心理教育という切り口でまとめられた研究はまだ少ないと行うことができる。さらに、「支援システムの構築と運用を意識して行うこと」については、「支援プログラム」を考えていく研究が多く見られたことが、その対象者の支援だけではなく、その支援を般化してシステム化することを意識しており、共通する要素と考えられる。「個からネットワーク、支援システムまでを視野に入れた活動モデルであること」、「既存の理論と技法に新しい取り組みを取り入れていること」という部分についても、本研究の分類の結果見出された「生態学的視座で見る」ことや「新しい変化に対して開かれている」ということと共通する要素と考えられ、コミュニティ心理学的実践の構成要素として、ある程度一般化される特徴であると考えて良いかもしれない。それに加えて、本研究では「原因探索的な視点ではなく、支援志向的な視点で実践する」ことや「環境そのものよりも環境の中にある個人に関心が高く、環境が個人に与える心理的影響の改善に関心を持っていること」などが独自に見出されている。これらのように、支援志向的に支援システムを構築していくことは、予防やエンパワメントにもつながるものであり、コミュニティ心理学が広く社会に貢献していくことができる点であるかもしれない。

これらの比較検討や分類の結果から、本論文では以下の4点をコミュニティ心理学的実践の構成要素として考える。

- ①現状に至る背景や影響などに目を向けて実践する（生態学的視座で見る）
- ②原因探索的な視点ではなく、支援志向的な視点で実践している（洞察を得るためではなく、支援を行うためのアセスメントを行う）
- ③社会状況の変化に応じて生じてくる新しい変化に対しても、積極的にその課題の成り立ちを考え、生態学的視座に基づいて、支援を検討していく（新しい変化に対して開かれている）
- ④環境そのものよりも環境の中にある個人に関心が

強く、環境が個人に与える心理的影響の改善に関心を持っていること

今後、これらの要素に基づいて、各々の実践事例などを検討し、より詳しく考えていきたい。

#### 4. 今後の課題

まず、今回の研究手法の限界として、日本コミュニティ心理学会は会員数556名（日本心理学諸学会連合ホームページより）という小規模の学会であるため、ある領域に関心のある学会員が何度も同じテーマで投稿をすると、その領域の研究が多いという結果が出てしまうという、参加者の関心の影響が強く出てしまうということがある。そのため、今回の分類の結果を全体的な傾向と言い切ることは限界があるが、現時点での傾向として考えることとしたい。また、分類の結果から、これまで多く研究されてきたテーマと共に、今まであまり研究されてこなかった部分についても知ることができた。例えば、「具体的な介入技法やプログラム」の部分は、成立背景等の研究に比べると少ないことがわかる。さらに、社会問題やコミュニティ課題と考えられるが登場していない領域の課題として、「貧困問題」、「騒音問題」なども挙げられる。これらのように、現時点で研究が進んでいない領域についても、より多くの目を向けていくことが必要であると言える。このように、まずは理論的背景が整理されることが必要であったが、今後は、コミュニティ心理学の視点を活かした具体的な実践報告や、プログラムの提案など、具体的な支援方法が蓄積されていくことが望ましいと思われる。その部分を筆者自身も今後の課題として取り組んでいきたいと考える。

#### 引用文献

- 安藤延男「日本コミュニティ心理学会の発足にあたって」（『コミュニティ心理学研究』2巻1号、1998年）1頁
- 笹尾敏明「コミュニティ心理学の歴史と動向」（日本



- コミュニティ心理学会編『コミュニティ心理学ハンドブック』, 東京大学出版会, 2007年) 4-34頁
- Dalton, J., Elias, M., Wandersman, A. 2006 「Community Psychology: Linking Individuals and Communities」Wadsworth Publishing. (笹尾敏明訳「コミュニティ心理学 個人とコミュニティを結ぶ実践人間科学」, 金子書房, 2007) 17-23頁
- 星野命「境界を超える心理学—コミュニティ心理学の旅立ち・道程・旅先」(『コミュニティ心理学研究』9巻1号, 2005年) 41-59頁
- 飯田香織「コミュニティ心理学におけるコミュニティの定義とコミュニティ心理学の独自性」(立命館産業社会論集 49巻4号, 2014年) 79-99頁
- Orford, J. 1992 「Community Psychology: Theory and Practice」John Wiley (『コミュニティ心理学—理論と実践』山本和郎訳, ミネルヴァ書房, 1997年) 4-5頁
- 窪田由紀『臨床実践としてのコミュニティ・アプローチ』(金剛出版, 2009年) 27-208頁
- 松原達哉「UPI」(岡堂哲雄編『心理検査学』, 垣内出版, 1993年) 455-474頁
- 日本心理学諸学会連合ホームページ  
<http://jupa.jp/category2/jimukyoku.html>
- 植村勝彦『現代コミュニティ心理学 理論と展開』(東京大学出版会, 2012年) 12頁, 73-83頁, 243-244頁
- 鵜養啓子「学校アセスメントから予防・啓発へ」(村山正治・鵜養啓子編『子どもの心と学校臨床 No.5』, 遠見書房, 2011年) 2-10頁

## The Components of Community Psychology

IIDA Kaori<sup>i</sup>

**Abstract** : In Community Psychology, not only individual counseling but also the relationship between people and their environment is considered important. Accordingly, the study of community psychology can involve numerous issues such as environmental conservation, violence, policy proposals for environmental improvement, traffic issues, the environment surrounding foreign students, school counseling, and so on. However, few studies have been conducted on the definition of community psychological practice. The main focus of this paper is to classify papers written about community psychological practice and to find the components of community psychological practice.

This classification has been made in three phases: firstly, sorting out papers whose keywords are community psychology, and secondly, classifying these papers into three categories, whose topics are (1) causes or background of issues (2) supporting systems (3) practical intervention techniques or supporting programs. Thirdly, each of the papers in these three categories go to another three smaller groups, which are environmental support, support for particular people, and support for individuals, respectively.

As a result of the above classification, four components have been clarified. The components in community psychological practice are as follows: 1. The focus of attention is on how an individual situation has been created (Ecological Point of View). 2. A supportive point of view is more valued, rather than an investigative point of view. 3. Pragmatic approaches are taken (adaptability to social change). 4. More attention is paid to the individual and the psychological influence of a particular environment on that person, rather than to the environment itself.

**Keywords** : community psychological practice, the components of Community Psychological practice, ecological point of view, supportive point of view

---

i Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University